

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：37125

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K12204

研究課題名(和文)自己イメージに焦点を当てた支援プログラムが中堅前期看護師の看護実践力に及ぼす影響

研究課題名(英文)The effect of a support program focusing on self-image on nursing practice skills of early mid-career nurses

研究代表者

鶴田 明美 (TSURUTA, AKEMI)

聖マリア学院大学・看護学部・教授

研究者番号：10341976

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：臨床経験3年以上20歳代の中堅前期看護師(以下、中堅前期看護師)は、患者・家族との関係困難を抱え、それには否定的な自己イメージが影響している。他者との対話と並行して自己実践を熟考する内省は、自己分析力と洞察力を高め自己イメージの変化と看護実践力の向上をもたらす。そこで、患者・家族との関係場面について同年代のグループで看護実践の見つめ直しを行うプログラムを作成し、実施した。その結果、本プログラムは、自己イメージの肯定的変化と看護実践力を向上させる効果が期待できることが明らかになった。反面、自己内省の促進、自己評価力の向上が自己イメージと看護実践力の低下に繋がる可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本プログラムは、グループメンバーが相互にメンターとして機能し、個人が肯定的なフィードバックを得られることにより、自己省察が促進され、自己課題の明確化が図られる。その結果、中堅前期看護師の自己イメージの肯定的変容、看護実践力の向上が期待できる。したがって、本プログラムは中堅前期看護師の離職率の低下や看護実践力向上に向けた支援に大きく貢献できる。

研究成果の概要(英文)：Early mid-career nurses with more than three years of clinical experience and in their twenties (hereafter referred to as early mid-career nurses) have difficulty in relationships with patients and their families, and this is influenced by negative self-image. Introspection, which contemplates self-practice in parallel with dialogue with others, enhances self-analysis and insight, changes self-image, and improves nursing practice. Therefore, we created and implemented a program to review nursing practice in a group of the same age regarding the relationship between patients and their families. As a result, it became clear that this program can be expected to have the effect of positively changing self-image and improving nursing practice skills. On the other hand, it was suggested that promotion of self-reflection and improvement of self-evaluation ability may lead to deterioration of self-image and nursing practice ability.

研究分野：看護学

キーワード：中堅前期看護師 自己イメージ 支援プログラム 看護実践力

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

医療現場の先進化・複雑化に伴い、専門性を基盤とした質の高い看護を提供できる看護師の確保は、将来にわたり看護の質を保証する上での重要課題である。その上で、中堅前期看護師は次世代を担う重要な人的資源といえる。しかし、役割負荷や家庭との両立困難から離職の可能性が高い世代である。

臨床経験3年以上20歳代の中堅前期看護師は、役割や責任範囲の拡大による過負荷、仕事と家庭との両立困難による心身疲労が蓄積しやすく、離職願望が生じる可能性が高い。看護師の離職願望は自尊感情の低下が始点となり、自尊感情の基盤には自己イメージがあると言われる¹⁾。肯定的自尊感情の向上や否定的自尊感情の改善には自己イメージへの介入が有効であり²⁾、自己肯定感は学びや生きることへの原動力を生み出す³⁾。自己の実践を熟考する内省は、自己に対する分析力を高め、自己イメージの変化をもたらす。

これらをふまえ、自己と向き合い自己イメージの肯定的変容を促すための方法として、中堅前期看護師と患者・家族との関係の場面に焦点を当て、同年代のグループによる対話を通して看護実践の見つめ直しを行うプログラムを作成し、実施した。そして、予備実験として中規模病院の中堅前期看護師を対象に作成した介入プログラムを実施した。その結果、参加者に肯定的な自己イメージや自尊感情の高まりをもたらし、離職願望を消失させる効果があること、さらに、自己の課題の明確化や仕事への前向きな取り組みをもたらす効果があることが分かった。

2. 研究の目的

中堅前期看護師の自己イメージに焦点を当てた看護実践の見つめ直しプログラムの、自己イメージの肯定的変容と看護実践力への影響について検証すること。

3. 研究の方法

A 施設の中堅前期看護師11名を対象に、Gibbs(1988)のリフレクティブジャーナルを用い、1グループ5~6名、毎月1回60分1事例、全10回のプログラムを作成し、実施した。プログラム参加による自己イメージと看護実践力の変化を確認するため、参加前後に無記名自記式質問紙調査を実施し、プログラム全10回終了後に看護実践の変化について構造化面接を行った。質問紙調査の調査項目は、基本属性、自己イメージの測定は中堅前期看護職者の自己イメージ評価表16項目、看護実践力の測定は看護師の問題解決行動自己評価尺度45項目で構成した。参加前後の得点比較はWilcoxonの符号付順位検定をSPSSで行い有意水準は5%とした。面接データは逐語録を作成し、語り前後の意味内容を捉えながらインビボコード化した。分析過程では研究者間で検討を重ね、分析結果は参加者確認により真実性・信憑性を確保した。

倫理的配慮は、所属機関及び研究対象施設の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

プログラム参加者は、平均年齢27.2±2.4歳、平均臨床経験年数5.0±1.6年であった。

(1) プログラム参加前後の自己イメージ得点と看護実践力得点の比較(表1)

参加前後の全体の得点比較では、自己イメージ、看護実践力共に有意差は無かった。個別の得点推移では、参加後に得点が上昇した割合は、自己イメージ72.7%、看護実践力45.5%、両方36.4%であった。参加後に得点が低下した割合は、自己イメージ28.3%、看護実践力54.5%、両方18.0%であった。

個別の得点推移から、参加後自己イメージと看護実践力共に上昇していた反面、両方共に低下したことも示された。両方共に上昇したのは、仲間が相互にメンターとして機能し肯定的フィードバックを得られたことや仲間の体験知を活用できたためと考えられた。両方共に低下したのは、内省により自己の否定的側面に気づいたり、多角的視点の獲得により客観的評価力が向上し、自己評価が適正・厳密化したためと推察された。

表1 プログラム参加前後の自己イメージ得点と看護実践力得点の比較

	自己イメージ		看護実践力	
	前	後	前	後
中央値(範囲)	44(25-59)	49(36-68)	163(118-194)	163(120-204)
参加者				
A	39	49	155	163
B	42	58	178	171
C	46	44	135	183
D	25	38	163	175
E	52	59	184	160
F	44	37	161	158
G	33	38	150	140
H	38	68	194	204
I	59	61	185	149
J	44	36	191	182
K	46	49	118	120
有意確率	.091		.824	

自己イメージ得点、看護実践力得点の前後比較: Wilcoxonの符号付順位検定(有意水準5%)

前: プログラム参加前の得点 後: プログラム参加後の得点

(2) プログラム参加前後のインビボコードと語りの内容(表2、3)

参加前の看護実践について抽出されたインビボコードは12コードであり「急性期は患者と接する期間が短いため機会を逃さず思いを聴き援助する」「周囲から評価され任された事は自分で考え行動できる」「不測の事態には上手く対応できない」「配置転換で新たな技術や知識の習得に追われ流されてしまう」等であった。参加後は12コードであり「他職種と連携し患者の希望を叶えている」「できない事や知らない事を同僚に相談し協力を求める」「仕事で気になった事は自問し他者に確認する」「後輩看護師に自分から声をかけ共に考える」「仲間の実践に触れ力不足を感じ自信が揺らいだ」等であった。

参加前は、患者の思いの把握に尽力し、周囲の評価を得て自信を持ち看護を実践している一方で、不測の事態や未体験・未習得の事象では適切に対処できないことが示された。参加後は、自分の力量不足や疑問に対処しながら他職種と連携し看護を発展的に展開し、後輩看護師に自ら歩み寄り課題解決を図る状況が示されていた。他方、仲間の実践が自信低下の要因になっていることも示された。これらの変化には、「仲間に解ってもらえ嬉しかった」「仲間の意見は新鮮で刺激的、実践が広がった」等、仲間による相互理解と相互刺激が発展的、協働的な実践に影響している一方で、「仲間は凄い、自分は仲間のようにできていない」と、仲間の実践が自己の実践への過小評価に影響していることが述べられていた。

(3) プログラムが自己イメージと看護実践力に及ぼす影響と今後の展望

これまでの看護実践力向上のための支援は、看護技術講習や看護過程演習など集団を対象にした知識・技術の強化に係る内容が多い中、本研究の独創性は、中堅前期看護師への支援の評価として、自己イメージに着眼した点と、同年代のグループによる対話を通したプログラムを実施することにより自己イメージの肯定的変容と看護実践力向上への効果を明らかにする点であった。本プログラムは、仲間が相互にメンターとして機能し、個人が肯定的なフィードバックを得られることにより自己内省が促進され、自己の課題の明確化が図られると考えられた。

研究の結果、研究当初の推測通り、中堅前期看護師の自己イメージの肯定的変化と看護実践力を向上させる効果が期待できることが明らかにされた。反面、プログラム参加による自己内省の促進及び自己評価力の向上が自己イメージと看護実践力の低下に繋がる可能性が示唆された。今回はプログラム参加直後の結果をプログラム参加前と比較しプログラムの効果検証を行った。今後は、プログラム参加による自己イメージと看護実践力への影響について、プログラム参加後3カ月、6カ月等経時的変化についての追究及び個別支援体制の構築を目指す予定である。

プログラム参加前のインビボコード	プログラム参加前の参加者の語りの内容
急性期は患者と接する期間が短い機会を逃さず思いを聴き援助する	急性期は短い時間で関わるので患者の一斑を逃さず早めに関わっている 気になる患者には、機会を逃さず向いて話を聞いている
周囲から評価され任せられた事は自分で考え行動できる	自分に任せてもらえ、自分で考えてやって、評価してもらい自信につながっていた 患者に関心を寄せ、一緒に考えたりできるのは自分の強み
不測の事態には上手く対応できない	急性期は患者の命がかかっている、何が起るか分からない、経験したことがないことはすごく不安 今の業務の中で不安が大きく「これでいいのか」と聞けない中でのやり方 病棟は自分より後輩のスタッフが多く不安なそぶりを見せられない
患者の思いを受け流し一日が流れ作業になっている	今までは、患者から怒りをぶつけられたら「ああ、すごい怒られちゃった」とただその怒りや話を聞くだけだった ただ単にその日を過ごしたり、時間を過ごすだけで淡々と終わってしまっていた 流れ作業みたいになってしまったところがあり、個別の看護を言われてもなかなかできていなかった 患者が何かを伝えたいのだからと思って、「後で来ます」という感じで受け流していた
配置転換で新たな技術や知識の習得に追われ流されてしまう	病棟が異動になり毎日慌ただしく、覚えることが多く患者と関わる中でスルーしてしまうことがある
患者や家族への関わりに悩み踏み込みない自分がいる	患者と患者の周りの人たちの希望が違っているとき、患者の周りの人にどう情報提供したらよいか分からず一人ででもんもんとした。 患者が自宅に帰りたいと思っていても、実際は家族のサポートが難しいため帰れないという時に、どのようなサポートが難しいと思っているのかという具体的なことは聞かず、ただ漠然とどうしたらよいかと足踏みしていた 「あなたで良かった」と思われる看護をしないといけないと自分の中で思っているが、寄り添えていないことがあった 患者や家族の顔色を窺い、踏み込みない自分がいた 告知を受けた患者やその家族とどう関わればいいのかかなり悩んでいた
自分に与えられた仕事さえきちんとできればいい	言われたことだけをやれば何も言われたいと思わず、与えられた仕事はきちんとやってきた 自分のことだけで善しとし満足していた これまで経験豊富な先輩の中で守られてやってきた
異動先の病棟でできない自分はいなくても同じ	5年目で大体のことできるという前提で異動になったが、できない自分しかなかった、こんな自分はいなくても同じだと思っていた 小児科の経験が少なく、成人は全然分かっていない、そこが一番自信なかった 病棟を異動したばかりのときは、患者がもうすぐ息を引き取るかも知れないという場面に立ち会った時、家族にうまく説明できず先輩にバトンタッチしていた
自分の看護はこれでいいのかこの先どうしようかと思う	病院でのやりづらさがあり、患者に接するというよりも、どう生きていこうかと思っていた 患者や周囲の人に「優しいね」と言われていたが、自分はイライラやモヤモヤもたくさん抱えながらやってきた ある程度経験があるのでできて当然だが、看護に対してこれでいいのか、この先どうしようかと思っていた
患者や家族のためには頑張れるが病院のためには頑張れない	フラストレーションがあり看護師じゃなくていいかなと思っていた 患者や家族のためには頑張れるけど、病院のためには頑張れない 自分に対する期待の高さはありがたいが、すごく重荷で期待の重さに耐えられない 上司から指摘されたり怒られたりしても流していた
できないことばかりで自信がなく日々不安で疲弊していく自分がいる	日々不安で、自信がなくびくびくしながらやっている、疲弊していく自分がいた 指摘されることが多く、全然だめだと思うことがあった 人からの評価を気にしすぎる自分がいた 患者から怒りをぶつけられることが多く、辛くて疲弊していた できないことばかりで看護師は続けたくないと思っていた
自分の考えを「言う」ことが大きな壁になっている	自分の考えがあっても立ち止まってしまう言えない、「言う」ことは自分にとっては大きな壁 助けてほしいって思っているけど、言っていないのかな、自分の考えはあっているのかな、正しい行動なのかと不安になり、言い出せなかった 人に何かを言ったり、説明したりするのが怖かった

プログラム参加後のインビボコード	プログラム参加後の参加者の語りの内容
他職種と連携し患者の希望を叶えている	患者への関わりが自分だけでは難しい時、先輩にも相談し、薬剤師にも相談し、いつもと違う方法で実践できた 患者と周りの人の意向を自分の力ですり合わせてあげたいと思っても自分一人では力不足の時は、チームの同僚や患者を支えてきたケアマネジャーなど、多職種に相談するようになった 患者に「家に帰りたい」と気持ちを打ち明けられた時「これ、私、今行動するしかない」と思いすぐに主治医に伝え、看護部長に相談しソーシャルワーカーにも声をかけカンファレンスを開いた 外来の業務が分かり、だから病棟がきちんと引き継がないとはいけなと思い、外来と病棟をつなげることができた 明日どうなるか分からない状況にある患者や家族と面と向かって関わることが増え、今行動することが大事なんだ、患者と家族のその一日の質が大事だと思うようになった 自分が得た情報は、自分がいなくてもチームで看護が続くよう記録に残している
患者と向き合い患者の思いに踏み込んで傾聴する	踏み込まないと進まないと思い、開ける、聞くこととしている 人が思っていることを自己判断していたが、相手はどう思っているか聞くようになった 患者の思いに踏み込んで聞き患者の気持ちに触れ反応が変化したとき、看護している実感、自分がいる意味を感じた 患者が怒りをぶつけてきた時、患者は日々の不安の中で生きていてどうしようもなくなり怒りをぶつけているのだと考えようになり「が不安だったんですよ」「あなたは、こういう思いだったんですか」と言葉にして聞くことができ、看護実践で変わったところ 忙しくても患者に向き合う時間を心掛けている 「ちょっと待てよ、患者の訴えはどうだったかな」と自分に投げかけることができるようになった 患者の思いを確認し真実を捉えることが大事、患者の中にしか答えはないと改めて思った 患者の思いを傾聴する、「お手伝いできることはありませんか」の一言を言っている 「この患者は病気をどう捉えているんだろう」と考え、患者に関して記録に残すということを意識して行動している
患者の状況を一步引いて考え一呼吸置いてか声をかける	イライラする患者、理不尽な患者と話さずときは、冷静とまではいかないが、あまり熱くならないような考え方、接し方を心掛けている 患者の気持ちに深入りしてしまうことが多かったが、患者の周りの人たちはどう思っているのだろうと、一步引いて考えるようになった 入院が長くなりそうな患者は、日々の中で注意に注意を重ね、一呼吸置いてから声をかけるようにした
患者や家族のために自分の考えを自分の言葉で説明する	患者や家族のために、最低限のことは伝えるようになった 患者が本当に言いたいことやうまく言えないことを代弁している 自分から言っていないといけないと仲間から学び、自分でも逃げたくないといい、自分の言葉で患者の家族に状況を説明できるようになった 人には人の、自分には自分の価値があると思いい、自分の思いは声に出して言うようにした 自分の病棟での役割を考えたとき、「自分の考えていることを発信したい」という意欲が出てきた おじづかなくても、聞いてくれる人は聞いてくれる、言ったほうが患者のためになる、自分のためになる、言おうと思えば言えるんだと思った
できない事や知らない事を同僚に相談し協力を求める	頼ってもらいたいんだ、助けてほしいと素直に言った方がタイムリーに動けるといい、援助を求めるようになった
仕事で気がなった事は自問し他者に確認する	引っ掛かったことは絶対に他の人に確認したり聞くようにしている まずは「自分はこうしようと思うが、どうですか」と周囲に確認してから行動している 場面を大きく見てみたらどうだろう、客観視して見てみようと思うことが増えた
先輩看護師に自分から声をかけ共に考える	自分から先輩に一声かけるようにしたら周りから相談を受けるようになった 先輩のことやプラスアルファを考えた上で、自らやっていたらいいかなと思う 自分の不安を先輩にも見せていい、先輩に相談したいいい、そうすれば先輩は自分たちが頑張らないといけないという気持ちになってくれると思う
仲間の実践に触れ力不足を感じ自信が揺らいだ	仲間は自分よりもシビアな場面に遭遇してすごい、自分は仲間みたいにやれていない 今まで積み重ねてきたことは、しかないという中で、自信を持って仕事ができるっていうことが本当に少ない 仲間には肯定的に言ってもらえたが、もともとやっていたり、ポジティブに捉えられない
自分が深めたい看護をするために一区切りつける	自分が深めたいと思った部分を認めてあげられるのは自分しかないと思った 今まで我慢していた気持ちや考えが整理でき、別のところで一区切りしたほうがいいと思うようになった
自分がいい自分にできることはたくさんあると思ひ頑張っている	うまくできなかった時はその原因をきちんと考えて、患者が望む形を叶えたいのもっと頑張らないといけないと思う 急性期で働いている人たちは同じ経験年数でも、自分とはちがう、自分の考えを持ってやっていかなければと思い始めた 自信がなく自分のことは駄目だ、ナースに向かないと思っていたが、プログラムに参加して「あ、自分にもできることがあるんだ」と気づき少しずつ頑張っている 自分にできることをすればいい、自分にもできることはたくさんある、頑張っていけると思った 自分のプラスの面を自問していかないといいかなと思った 仲間の事例に共感することが多く「ああ、同じような悩みを持ってんだ」といい、自分を頼りにしてくれる患者もいるので看護師を続けていこうと決めた 患者と家族にとって大事なところは、大事にしていこうと思っている、それが今のモチベーションになっている 自分もいていいんだ、自分を認めてもらえることが大きい、自分の存在価値を感じた
看護師としての将来の夢ができた	高齢者の生活に関われるようなところで働いていきたい、将来は管理よりも教育ができればいいと思う 経験を積んで、将来は緩和ケアで働きたいという夢ができた 若手のスタッフは辛いことがあると辞めたくなくとも思うので、将来はプラスに変えられるような役割に立ちたい ここに居て、自分が変えられることは変えていきたい
仲間の新たな意見で視野が広がり次の試みにつながっている	仕事はきついけど、踏み込むことでやりがいにつながる、やっていかなければいけない、エンジンがかかった 仲間の意見は新しく、自分の中に落とし込み、次の試みへの意欲につながった 仲間の意見が聞けて、視野が広がった 自分を認めてもらえ、きちんと看護できていると思えて嬉しかった 仲間の患者との関わりが、今の病棟での仕事に生かされている

<引用文献>

- 1) 小塩真司(2001)：自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響、性格心理学研究, 10(1), 35-44 .
- 2) 原田宗忠(2008)：青年期における自尊感情の揺れと自己概念との関係、教育心理学研究, 56, 330-340 .
- 3) 佐々木英和(1999)：第4章「自己肯定力」を育む教育の原理と可能性、人間の本质と自己実現、人間主義心理学会編, 58-86, 川島書店, 東京 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鶴田明美、前田ひとみ
2. 発表標題 自己イメージに焦点を当てた支援プログラムが中堅前期看護師の看護実践に及ぼす影響
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鶴田明美、前田ひとみ
2. 発表標題 自己イメージに焦点を当てた支援プログラム参加による中堅前期看護師の自己イメージと看護実践力の変化
3. 学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	前田 ひとみ (MAEDA HITOMI) (90183607)	熊本大学・大学院生命科学研究部(保)・教授 (17401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------